

討 論

日本人と文化摩擦

大 島 貞 夫 (明治学院大学)

Sadao OHSHIMA (Meiji Gakuin University)

星 野 命 (国際基督教大学)

Akira HOSHINO (International Christian University)

岩 崎 徹 也 (東海大学)

Tetsuya IWASAKI (Tokai University)

河 野 貴 代 美 (フェミニストセラピー “なかま”)

Kiyomi KAWANO (Feminist Therapy “Nakama”)

渡 辺 文 夫 (東北歯科大学)

Fumio WATANABE (Tohoku Dental College)

昭和62年10月24日、本学会の公開シンポジウムが日本大学文理学部412教室で行なわれた。なおこの文章の責任は司会役をつとめた大島が負うものである。

村井(事務局)：公開シンポジウムを始めたいと思います。応用心理学会の事務局の日大の村井です。この行事は応用心理学会の恒例の行事となっておりますけれど、調べてみましたら、1971年に第1回をやって、その後だいたい年1回ずつやっておりますけど、今回で14回目にあたります。今日は先に御案内しましたような、日本人と文化摩擦ということで行いますけれども、応用心理学会の常任委員会が今年の5月頃からという相談しまして、今日司会なさっていただく大島先生、それから御来場の恩田先生を中心にこの企画を練っていただきまして、今日開催する運びになったわけです。あいにくの雨でちょっと出足が悪いんですが時間がまいりましたので、これから始めたいと思います。それでは司会の大島先生よろしくお願いたします。

大島(司会)：司会を務めさせていただきます明治学院大学の社会福祉学科で臨床心理を教えております大島でございます。時間的枠組みは数分いただいて御紹介をした後、各シンポジストの先生方に3：50まで持ち時間25分でお話いただき、10分休憩、4：00から追加あるいはシンポジスト同士の質疑応答で4：40まで、残り時

間がフロアーの皆さんとの質疑応答という時間です。先程司会の村井先生から触れられたように応用心理学会の運営委員会で恩田先生が公開シンポジウムの案として、異文化の問題を出されまして、私が文化摩擦ということをごさしたもので、両方の意図を含みまして、日本人と文化摩擦というテーマにさせていただきました。私と恩田先生が企画ということで今日のシンポジウムにいたったわけです。シンポジストの先生には雨の中、遠い所忙しいところ、お越しいただいて非常に恐縮しておりますが、私がこのテーマを選んだのは一つは個人的な理由で、私は1969(昭44年)にカリフォルニアに行っておりまして、個人体験的にもカルチャーショックを受け、まさに文化摩擦という問題を考えざるを得なかったのです。2番目にはいわゆる日米経済摩擦、文化摩擦という問題が折しも起こっておりまして私としてはそういう社会的立場から関心を持たざるをえない。またひいては我国の指導者の選び方など国内におる者としても、何かカルチャーショックを受けるような形などと、考えざるをえないということを含んでいるかもしれせん。3番目、帰国子女の問題がおそらく各大学でも問題となって

いると思いますが、帰国子女の選考に携わったり、あるいは学生相談が帰国子女の学生相談などに、対処してますと、やはりこの十数年前とは違って大きな文化摩擦という問題を感じるこの頃です。4番目には国際ということが非常に叫ばれておりまして、大学の中で教員でも、アメリカ、ヨーロッパからあるいは東洋の他の国々をからくる方が増えているのですが、何かそれに対応する先生方＝日本人の先生方の適切性というものもちょっと疑問視するというのが私の心の中にもありまして、そういう点も含めて、文化摩擦ということをかねがね考えていたわけです。このようなことを基本にしてテーマを選んだわけですが、簡単に今日お話しくださいます先生方の紹介をさせていただいて、本題に移りたいと思います。

星野命先生は現職はICUの教授で、昭和27年東京大学文学部を出られ、昭和30年から2年間アイオワ州立大学、ミシガン大学に留学され、その後名古屋大学の精神医学教室で臨床心理の研究をされて、32年にICUに赴任され現在日本社会心理学会と異文化間教育学会の理事をされており、『異文化との出会い』『異文化とのかかわり』という2冊の本を川島書店から出しておられ、『カルチャーショックと日本人』という著書を有斐閣から出しておられます。星野先生には総論的に日本人と文化摩擦を扱っていただくということでお願いします。岩崎先生は、精神科医であられ、昭和34年慶応大学医学部を卒業、昭和44年～47年までアメリカのトベカにあるメンガークリニックに精神分析学の研究のために、御留学され、帰国されて昭和49年東海大学医学部に赴任され、昭和54年教授に昇進なさいました。著書としては「精神分析的病院精神医学」、これは「精神分析研究」の20巻、22巻に掲載されています。それから文化論と精神療法論を「精神療法研究」1973年の巻に載せておられます。今日はセラピストと患者の関係をひとつ含めまして、文化摩擦の問題を論じていただくことになってます。次は河野貴代美先生ですが、1962年日本福祉大学を卒業され、杏林大学の前身である新川病院のPSW並びに、桜ヶ丘保養院のPSWをなさいまして、その時私の同として、御一緒に仕事をしたことを思い出しますが、1968年に渡米されて1979年に日本へ帰ってこられました。その間シモンズ大学の社会事業大学院修士課程を終了されまして、その専門で著書等御活躍されました。日本にはお帰りになってから現在は、「フェミニストセラピー：なかまという女性のための、assertiveなグループ、自己主張のグループを指導されたり、カウンセリングをされています。著書として『女性のための自己発

見学』（学陽書房）、『女性と狂気』（ユック舎）を1985年に出版されています。渡辺丈夫先生は現在東北歯科大学の助教授をされていますが、昭和50年上智大学の修士課程を終了されてから赴任されまして、昭和53年にハワイにある東西センターの文化学習研究所の専門研究員をされました。昭和55年から58年までフィリピン心理学研究研修所 異文化間関係部門主任研究員及びフィリピン大学心理学の客員講師をされて、昭和60年から現在までアジア経済研究所の研究員をされています。著書、論文は先程星野先生の所で一寸あげました「異文化とのかかわり」、「異文化との出会い」に論文をお出しになっております。今日の表題にもありますように、どちらかと言えばアジアに力点をおいて、文化摩擦問題を考えていただく資料を、この場で出していただくことになってます。私は現職は明治学院大学でありますけど、その前に7年間桜ヶ丘保養院という精神科の病院で、臨床心理をやっております。多少のかかわりはありますが、ずっと精神医学の周辺分野、心理学との関係を持って仕事を続けております。時間もありませんのでさっそく最初の星野先生からお話いただきたいと思ひます。

星野：一番最初に総論的なところから始めまして、なぜ日本人の場合文化摩擦が問題になるのかというあたりまで話をしたいと思ひます。まず文化摩擦という言葉ですが、これは決して昔からあった言葉ではなく文化という言葉、あるいは摩擦という言葉はそれぞれ辞書にもなっておりますし、それについてのいろいろの専門的な研究もあるわけでございますけれども文化摩擦という言葉それ自体が使われるようになったのはきわめて新しいと申しますか1971年昭和46年11月11日、国際学研究会という当時東京大学教養学部の教授であられた衛藤藩吉先生がその国際学研究会、東大の国際関係論研究室が中心となり、比較文学、政治学、経済学、文化人類学の研究者を学際的に集めて行われていた研究会で始めて文化摩擦を論じ南北問題に及ぶという口頭発表をなさいまして、衛藤教授の命名になるときいております。この時の口頭発表は文字にはなりません、後に別の論文で文字になるのでありますけど、この文化摩擦という言葉をなぜ使ったかということについて衛藤教授は、英語の conflict にあたる概念として一般には紛争であるとか対立でありとか、また心理学では葛藤という言葉を使っておりますけれども、紛争も対立も共に語感としてはマイナスの価値の含みがある。したがって自己流の概念の表現としてあまり紛争や対立という言葉を使うのは好ましくないと考えたそうでありまして、衛藤先生によりますと cultural conflict というのは異質の文化が接触した時に必ず

起こる社会現象で、それは避けようと思ってもなかなか避けることができない。そして混乱や対立もそこから起きてくるのだけでも、また新しい価値も生まれてくるし新しい文化を生れてくる可能性がある。文化の変容しうるかもしれない。決してマイナスの価値だけではなくきわめて中立的な概念であるということ強調したかったので、cultural conflict を文化摩擦と訳したということでもあります。まあそう言われますと心理的緊張も心理的葛藤も訳してそれ自体マイナスに働くわけでなく、そこから病理的な現象も起きるけれど、その葛藤を乗り越えた場合には次の発展、あるいは成長といったものが生まれる可能性を持っているので、こうした緊張、葛藤、摩擦というものの過程をたどって始めて個人の理解や変化もたどることができますし、それを集団や一国の文化にあてはめてみても、その文化の理解や発展の筋道というものは、こうした葛藤の研究ということから行なわれて当然だと思ったそうであります。その後1972年10月にこの国際学研究会は箱根でセミナーを行いまして今度は衛藤先生御自身が文化摩擦と国際関係、嘉治元郎先生が経済活動における文化摩擦、大西昭さんが発展途上国開発援助と文化摩擦という報告を次々に発表されて、これが後に出版されます。1976年春からは文化摩擦の分析に関心を持ちます経済学者、政治学者、文化人類学者、社会学者、精神病理学者、歴史学者などが集まりまして、当時私が勤務しておりました国際基督大学の山本達郎教授を中心に一つの研究チームができました。しかし最初から世界的規模における文化摩擦を取り上げるのは大変だということで、当面東アジアと東南アジアを対象を限定し研究を開始した。そして1977年度ちょうど10年前文部省科学研究費補助金の特定研究に取り上げられましたので、その組織を拡大しまして最終的にはいろいろな分野の研究者17チーム、のべ160名を集める大研究プロジェクトとなりまして、何千万という研究費がそれに払われ、3年間頻繁に研究会が行なわれ文化摩擦研究はその時に市民権を得たといわれています。1978年2月には文化摩擦国際シンポジウムが東京のグランドホテルで開かれ、またその翌年1979年2月には3日間第3回国際摩擦シンポジウムということで大磯プリンスホテルで200名以上の研究者が集まって大会が行なわれたわけでございます。このころから新聞雑誌にも国際関係とりわけ国際経済関係の一樣相を示す言葉として摩擦という言葉が、にわかに頻繁に取り上げられるようになりました。経済摩擦、貿易摩擦、日米摩擦、日米欧摩擦、国際摩擦だの、そしてこれにあたる英語もできてまいりまして、たとえば貿易摩擦について trade friction、経済摩擦につ

いては economic friction というような conflict を避けた英訳の言葉も、これは日本語から訳がつくられたように思われます。この大プロジェクトの特定研究の成果はその後、1980年に衛藤藩吉編『日本をめぐる文化摩擦』という本となって著われ弘文堂から出ておりますし、1982年大林太良編『文化摩擦の一般理論』として巖南堂書店から発表されました。この17チームの中には何名かの心理学者、特に社会心理学者が参加しておりました、慶応の佐野勝男さん、南隆男さん、東京工業大学の稲山貞登さん、東京大学の古畑和考氏等社会心理学の立場からもこの研究に参加しておりますし、精神病理学の立場からは筑波大の稲村博さんや当時慶応大学におられた荻野恒一先生も参加しておられました。私は大林太良さんをリーダーとする文化摩擦の一般理論研究班に属しまして、研究会の口頭発表を後に個人レベルの文化摩擦についてという一文にまとめ大林編の「文化摩擦の一般理論」にのせました。以上が文化摩擦という用語の始まりと発展について述べたわけですが、それがどういう意味を持っているか定義の試みをしてみたいと思います。衛藤さんの書かれたものをみますと、こういうふうに書いてあります。「文化摩擦は異質の文化が相互に接触した時に必ず心理的緊張や葛藤に続いて発生する社会現象である。混乱や対立も起こるが同時にそこから新しい価値や文化も生まれ、文化の変容もおこる。決してマイナスの価値のみだけでなくきわめて中立的な概念である。そして解説として今日の相互依存の緊密なネットワークに編み込まれた国際社会では個人のレベル、つまり個人の内面、個人間でも、また集団のレベルも、集団内部、集団の間でも、民族のレベル、地域の間、国民の間などでげ日常的に生起している現象で、2つ以上のレベルにまたがって重層的に発生することもある」ということでございます。文化摩擦というのは政治現象、経済現象の中にも含まれていて、また国際関係においてのみ生起する現象でなくて、国家や社会の内部においても集団間に文化摩擦がありうることをいっております。そして我々が政治的紛争、経済摩擦と考えている事柄の中に人間の行動様式、思考様式の違いあるいは人種偏見などがあることが政治的な案件をいわずに紛糾させる事例は、世界史上数多く存在するので、これを文化の問題として今まで取り上げてこなかったことが不思議だということでもあります。国内の内部における文化摩擦の例として衛藤さんは、薩摩鹿兒島で育った人と江戸の下町っ子との間に文化摩擦がないとは誰も考えないであろうといっております。また公文俊平さんは文化摩擦とは最も広義には異文化帯間の相互行為にもなって発生

するあらゆる広義の摩擦をさす。狭義には狭い意味では広義の文化摩擦のうち文化、つまり主体の属性としての生活様式や相互行為の様式習俗や道德などの文化そのものを争点とするものを、狭義の文化摩擦と定義できるとのべておられます。文化摩擦には様々な局面ないし段階が区別できます。一つは相互行為自体に生ずる摩擦、二番目に個々の主体に生ずる機能不全いわゆる文化ショック、カルチャーショック、三番目に主体の内部に生ずる構造的な歪み、こういった3つの段階を区別しているのが公文俊平さんです。具体的に文化摩擦にはどんなものがあるかということについてみますと、日本人が海外にでていった例というのは、あるいは異国体験といえますのは一番古いところでは、天平8年紀元736年の新羅への外交使節や阿倍仲麻呂や吉備真備や僧玄昉らの遣唐学生、唐の国ですね、にいった人々がおりますし、また承和5年838年に唐へ渡った円仁、慈覚大師などがいました。こういう古いところでは、当時の日本の造船術や渡航技術からして非常な危険を冒していったわけでして、いった先でも亡くなった方や目的を達成せず帰ってきた人や、行方不明になった方等随分いろんな方がいたと思いますしそこで体験いわゆる文化摩擦の体験がたくさんあったはずでありますけど、今に残っている記録というのは非常に数が少なく、阿倍仲麻呂の歌などが残っておりますけど、彼らがどのような文化摩擦を体験したかというようなことは想像するしかございません。ただ天正時代のキリシタン使節とかあるいは堺や博多の貿易商が東南アジアにいったとき、あるいは鎖国時代でも渡航した人々、漂流民などが危難に打ち勝って帰ってきた人々の場合、記録はある程度残っておりますが、まあ今日はそういう歴史的なことは、省きましたたとえば留学生あるいは技術研修生がどりいった体験をしたのかということで、留学生の例としてふさわしいかどうかわかりませんが、たとえば夏目漱石が文部省から派遣されてイギリスに行きロンドンに2年滞在しまして、明治33年10月～35年12月まで行っております。その彼の異文化体験が当時の日記及び短編という漱石全集第24巻に残されております。その中の1月25日のところをみますと、「西洋人は日本の進歩に驚く、驚くは今まで輕蔑しておったものが、生意気なことをしたり言ったりするので驚くなり、大部分のものは驚きもせず知りもせぬなり、真に西洋人をして敬服せしめるには、何年後のことやらわからぬなり、どだい日本はまたは日本人にiccou インテレスを持ってぬもの多くなり、つまらぬ下宿屋の爺いが日本をアプリーシエイトせぬなり、心中輕侮するの色あるをみて、自らしきりにほらを吹き、おれ及びおれの国を

えらそうに言えば言うほど向うはこっちをばかにするなり、こちらがりっぱなことを言っても先方の知識以上のことをいえば、iccou に通せずのみかこれをコンシートとみなせばなり、黙って切切とやるべし」ということを書いております。漱石はロンドンの煤煙に驚き、気味悪く感じしかしその中に住む英国人の美しさを不思議に思っただけと対照的な背の低い妙なきたない自分が黄色人種だと実感しました。そして下宿屋の爺さんが日本を尊重しないのみが、心中輕侮しているとかんじて日本のことを自慢するが、それも逆効果だとして黙ることにしたわけですが、こういった状態が続き、英国人は誰もがこにくらしく見えて、けっこうな天気ですといった店員に対してまでもかたじけなくも日本晴れを拝ましてやりたいと内心うっぶん晴らしをするようになりまして、お茶に招かれた家でもふんまんやるかたなく、西洋社会を呪っております。このあたり江戸っ子の坊っちゃんらしきまるだしといったかんじで攻撃的な対処のし方が日記に躍っております。さらに7月にはいと漱石は自分で自分の異常さに気がつき始めまして、そしてその後下宿の3階に蟄居して文学論に取り組み、おびたしい書籍を買いこんで神経衰弱、発狂とまでうわさされるに至ります。漱石自身はそのことを、一人で気楽でよろしい、世間の人間どもがおれのことを何とか言いたてても、おれが何をしているか知っているものはない。彼らはどっちから材料をえてそんなことを言っているのか、聞いてごらんと、彼は妻に書き送っておりますが、英国人とも日本人ともつき会わず、たった一人の留学生生活を続け、そして神経症かどうかわかりませんが、そういう状態が昂じて3年後に下宿で、当時ロンドンを訪れていた土井晩翠の看病を受けるに至ります。これは深刻なカルチャーショックの例として、しばしば精神病理学者が取り上げておりますが、精神分裂症の気味もあったとか、あるいはしかし、そういう状態を経て彼が後に作家として飛躍するに至る、そのいわば文化摩擦を克服したというところに彼の偉さがあるんだというような評がいろいろと出ております。漱石を始めとして明治期の文人作家はこの種の culture friction といいますか、あるいは culture shock を幾つも体験しているわけでありまして彼らの留学生生活はその後の特に現代の留学生に比べますと何か後ろに祖国とというものを背負い、かつまた自分の将来を探る意味で苦闘したあとが歴然としております。でこうした留学生の他にも多くのたとえば軍人や政治家などが参ります。森鷗外なども、軍人かつ作家として、ドイツに留学するわけですがそして鷗外の場合には漱石と違った、実に向こうの文化によく適

応し、堂々とドイツ語で演説をするなど、その活躍には目を見張るものがありますが、いずれにしても当時の留学生というのは、選抜されたエリートとして行っているわけでありまして、その個人的摩擦がただちに、祖国に伝えられまして、多くの人々の欧米観、西洋観というものを作るのに役立ったということがあると思います。政治家の場合には、常に国家の威信、あるいは将来というものを頭に入れまして、決して相手の社会や文化に完全に同化することは許されないわけでありましてそこで起こす摩擦はとかく時には戦争に結びつくような激しいものもあったということが言えると思います。また戦争中に世界、特に日本の場合には南方に進出したり、あるいは満州、中国に進出した軍人の場合には、そこで多くの文化摩擦を体験したと思われまふけどそれをやはり東亜の盟主日本の威信にかけても、それを圧搾、押しつぶしていくといひますか、国家主義的、軍事主義的な世界観あるいは国家観を持って、日本の秩序、日本の軍人政治家が考える秩序をもって相手の国や文化社会を律するという考え方があったように思われます。第二次大戦の終戦、敗戦によりまして、こうした国家主義的な背景を持つ、日本の威信を広めて、それにたつて各国をいわば大東亜共栄圏的な支配のもとにおくというような考えはなくなりましたけれど、えてして我々が持ちやすいこの文化摩擦のもとで、それに対応するやり方として大きく分ければ3つ、少し細かく分けると5つのタイプに分けることができます。じつはカレン・ホルナイの人々の対人態度に倣っていえば、*foward other culture* といひますか、他の文化に近づいていきそれに同化するという生き方、相手の文化が違ってれば違っているほど積極的に評価して、それに同化しようとする、迎合しようとする時には相手になびくといひますか、そういう態度。それから *against other culture*、他の文化の異質性と戦うことによって、あるいは攻撃することによって退けようといひますか。極端に相手に逆らうというやり方があります。もう一つは *away from other culture*、異文化に入ってしまった事情は事情として、そこに投げ込まれた時に心理的には逃避して、その異文化を拒否するという、そういう態度であります。しかし実はこの3つの態度の他にも、あと2つぐらいあるかと思いますが、その *other culture* というものに対して自分の態度をこうと決めないで、それに適応しようとしなないし、無関心でいる態度、実は日本人の場合一番多いのはこういうこともあったんじゃないかと思ひます。特に国内で外国からのいろんなものはいってきたときには、それを歓迎し迎合する人がいた反面、また反撥する人がいた反面、そ

れがはいってきてもそれについて自分の態度を決めようとはしないという態度もあったのではないかと思ひます。また一方少数ではあつても異文化の異質性を適応に評価し同時に自分の国の文化をより深く理解し、評価しようとする英語でいえば *coping with other culture* といひますか、そういう是々非々といひますが、相対的な立場でこれに臨んだ人々もあつたと思ひます。しかしこういう人が決して多くはなかつた、そして日本から海外へでていく時にはどちらかといひますと、逃避的か攻撃的かあるいは同化してしまうといひ、よくいえば西洋崇拜的な、悪く言えば自分の立場があるのかないのかといひうことを問われる態度もあつたように思われます。最近になりまして日本の経済成長とともに多くのビジネスマンが海外に出ていきます。そしてまたその他にはボランティアとして青年海外協力隊に入隊し発展途上国の文化水準や社会水準を上げるための努力をしている方々があります。この人達の姿はまさに日夜苦闘しているわけでありまして、この本国にいる以上に悪条件のもとで働きかつ、力を出し惜しみしない立派な方々が多いのでありますが、しかし時としてかつての軍人政治家と似たような日本のやり方あるいは日本の考え方を相手に押しついたり、あるいは逆に向うの人の考え方や儀礼あるいは価値観が理解できずに常に何か失敗を続けているという例も少なくありません。こうしたことについてはすでにいるんな報告書が出ておりまして、特に慶応大学の組織心理学研究会からは、佐野さんを始めとするいくつかのビジネスマンの海外での問題を何とかして解決しようとするカルチャーショック防止策としてのいろんな試みがなされております。それから最近話題になりました。さっきちょっと司会者がおっしゃつたのは、そういうビジネスマンや留学生などと一緒に海外へ出て行った家族の問題、特に子供たち、私はこれを海外帰国子女という言葉がありますけど、むしろ海外成長日本人としてその海外での学習や成長をプラスに評価したいと思ひますが、こうした人達の問題があります。これは一部伝えられましたように、大変向うに行きまして苦労し慣れたと思つたらまた他の国へ行かなければならぬ日本に帰つてこなければならぬ、行く先々で異なつた学校や教師そして言語学習の進度、教科というものにぶつかつて大変苦労するといひ。それを一つのスプリングとして自分達の可能性をととも本国では得られない形にのばしていくといひメリットがあるのでございませうけれど、その人達が日本にもどつてきた時の日本の文化、日本の社会の閉鎖性あるいは非寛容なところが問題となつてきております。いったい日本人がそうした異文化に接した時に起こ

る問題点は何かということになりますけれど、私はそれを4つぐらいにまとめてみようと思いました。1つはこれは何も日本に限らないのですけれど、我々が生活異文化の中であるいは異文化からこられた人と接触する際にどうしても自分の文化を1つの基準とする自文化中心主義、あるいは自文化優越主義といえますか、こういうところからなかなか免がられられない、相手もそれなりの歴史と伝統と価値をもった文化に属していてそれをお互いどっちが勝っているとか、劣っているということ自身大変むずかしいことでありまして、ご存知のように中曽根首相がいくつかの失言をいたしまして、アメリカのマイノリティグループの人達の憤激をかったというところにも、こうした自文化中心主義が現われている。これが1つの問題、あとは項目だけ申します。もう一つは愛憎症候群、私が両価性コンプレックスと呼んでおります。つまり自分より優れていると思うものに対してはそれに追随し迎合しそれをまねしようと思うけれども、自分より下だと思ふものについては、これを軽蔑したりあるいは嫌ったり、避けたりしようとする。こうしたプラス、マイナスが同時に存在するという。それからもう一つ3番目にはこれは subject culture と英語で呼ばれますけれども個体内文化あるいは、主体文化と呼ばれる個人の中における文化機構というものが、これが異文化との接触において、オートマティックに働く、その場合の主体文化の狭さともろさというものがありまして、これがどうも他国人以上に文化摩擦を起こしやすいし、それを処理する時に失敗しやすいという問題があると思えます。4番目に対人関係あるいは、自分に対するコミュニケーションの skill の問題があると思えます。コミュニケーションというのは言葉を使っても使わなくても非常に難しいのですが、特に相手と自分が価値観や世界観が違う時にこれを何とかしてやっていこうとする時の自分の中に様々な対応のレパートリーといえますか、いわばシナリオがたくさんある場合と、ただ単一的なものであるときとは当然文化摩擦の結果も、内容も違ってきます。日本人の場合には high context といえますか、網目社会のしかも単一社会でありますから、ざる目社会あるいは複合社会に生活する場合にはいろんな問題点があるわけです。最後に日本人は文化摩擦を超えることが可能かという、問題であります、時間がかかるし努力はしなければならない。しかしそれを超えることを民族的課題としませんと今後個人であれ、集団であれ、異文化の中にあるいは異文化とつきあって国際社会を作っていくことは難しい。ですから文化摩擦を超えることは100%は無理かもしれませんが30%でも

40%でもこれを超えるように努力をしなければならないというのが私の意見です。時間を超過して申しわけございません。

大島：どうもありがとうございました。星野先生から概括的な話をしていただきました。ちょっと連想したんですが帝国陸軍には戦争神経症はないといって昔の陸軍病院では神経症扱いをしなかった。実体は戦後研究者によって明らかにされたように、いずれの国にも戦争神経症がでると同じように日本にもあった。文化摩擦というもの、昭和以前のことで考えてみますと、今の話にありましたようにそれほど大きく取り上げられていなかった。しかし戦後になりまして特に今日に近い時点になりまして、いわゆる帰国子女といえますか、そういうことになりまして、選ぶと選ばざるにかかわらず、小さいお子さんの場合にはそこに放り出されるという、自分が選んだ運命ではないけれど、家族と共に行ってそういう文化摩擦を体験する。それから年配の留学となりますとこれは自分で選んで行っている。この辺にも文化摩擦を細かくみていきますと、この違った相が出てくるんじゃないか、特に最近の文化摩擦というのは今まで日本人として意識されなかったものが、だんだん意識されるようになってきたんじゃないか、意識化されたものをどう取り扱っていくかが、我々の問題の対象となりうると思うことができるのではないかと思います。次に岩崎先生からまた違った観点でお話があると思えますがよろしくお願いします。

岩崎：私に司会者の大島先生から与えられました題は精神療法における文化的差異というテーマです。私自身さきほど大島先生からご紹介いただきましたように、主として精神科の臨床にたずさわっております関係で、日本の中で日本人の患者さんに精神療法をした経験と、アメリカに渡りまして約3年ほどでございますが、日本の文化の中で育った精神科の医師として今度は主としてアメリカの患者さんを治療した経験がございます。そういった個人的経験を背景にいたしまして今日は、患者さんが持つ文化の差異、つまり私の場合にはアメリカの患者さんと日本の患者さんのもつそれぞれの特徴、もう一つは今度は治療者として私どものように日本の文化の中で育った治療者と、アメリカの文化の中で育った精神科医やサイコロジストたちの差異その二つの側面から精神療法における文化的差異という問題について考察してみたいと思います。私自身精神科の中でも専門は精神分析の領域でございますので、精神分析的考察を中心にお話をさせていただきます。精神分析と申しますと数年前から我が国の日本的な文化論、日本的な心性を論じた精神分

析的な業績といたしまして、私どもの先輩の土居先生の「甘え理論」がございまして、これにつきましては皆様方よく御承知のこととしますので改めてここで御紹介をくり返すことは避けませんが、ちょっと余談になりますが、実は土居先生の甘え理論を発想されるきっかけとなったこととして紹介されているのが、ちょうどたまたま私と同じかここが一に在る先生が留学なさった時に、アメリカの家庭に招かれて何かお茶かケーキかいかかですかという勧めを外人からいただき、そこで土居先生は「いや結構です」とまあ日本的に遠慮なさった。土居先生御自身はまあそう結構ですと言っても、「まあそう言わずに、一杯いかがですか」と勧めしてくれるだろうと思っていたところが、結構ですといったら外人の方はそれっきり本当に結構なんだと思って、本当は何かお飲みになりたかったのだけれども、それっきり何もくださりなかったと、そこに御自分の日本文化の持つ相手に対する甘えがあるというようなことから、発想なさったということが書いてございましたけれども、私自身も日本人ですからアメリカに行って同じような体験を幾つかいたしまして、土居先生のお話などを思いだしたわけです。そういう意味で精神分析的な日本人文化論、日本人の心性に関して土居先生の甘え理論が大変よく読まれましたし、評価されているわけです。私もその意味で土居先生の甘え理論を本当に文化論として、あるいは日本人の心性を論ずるものとして、大変高く評価すべきものだと思いますが、1つ今度は臨床家、今日の私のテーマの臨床的な立場、精神療法における文化的差異といった時にそういった文化論を私ども精神療法に臨床にたざさわる者が受け取る側の問題として、あまり文化の特徴のみにとらわれる。あるいは文化的差異のみにとらわれるとかえって文化の差異に治療者の目がいってしまって、それを超えた普遍的な問題である精神病理の問題に目をそらしてしまう結果になる危険性がある、という立場からお話申し上げたいと思っています。精神分析は御承知のように1900年前後ヨーロッパでジークムント・フロイトによって創始され現在までにすでに90年に近い歴史をもってきております。精神分析の発祥以来患者さん及び広くは人間一般の心理の中で重要な意味を持つ概念として、御承知のエディプスコンプレックスという概念がございまして。これももう皆様御承知と思いますが、エディプスコンプレックスはフロイトによって整理された概念ですが、もとはギリシア神話の中に出て来る物語に発しているわけです。要点は子供がたとえば男の子の場合には父親と競争して母を我が物にしようとする。いわば父母子の三者関係を巡る心理でございまして。そういう心理がフ

ロイトによりエディプスコンプレックスとして整理されて以来精神分析における中心的な概念として、特に患者さん、ヒステリーを中心とした病理を理解するためになるキーコンセプトとして現在に至っているわけです。臨床的に西洋人の患者さんを治療いたしますと、これが非常に鮮明にでてくることをしばしば経験しております。たとえば私が日本で経験したことですけれども西洋のある大使館関係の方の奥様が憂鬱を主訴にして私の所においでになって、約1年数ヶ月にわたって精神療法をした経験がございまして。その方の場合には診断的にはヒステリーとしてよろしいと思うんですけど、たとえば自由連想の中でお父さんとの近親相姦的な夢を見たことを話されたり、あるいは御本人の初めての性的な体験がお父さんと同年輩であったとかいうようなこと、そして今度は治療者である私自身に向っての父親に対すると同じような態度、感情、特に私に対する性的な願望などが治療の経過の中で、非常にはっきりと示され当時私は40を過ぎていた頃でしたけれども、そういった背景からでしょう、私自身がまだ独身であると思いついていた何かの機会に私が結婚していて子供がいるということを患者さんが知った時、非常にびっくりするという経過がございました。こういう患者さんを治療いたしますとエディプスコンプレックスが非常に鮮明に現れてきて、それがしかも治療関係の中で明確に再現されてくるという、フロイトの精神分析理論あるいはその後の精神分析医によってよく記されている。精神病理や治療技法に関する論文が非常にまざまざと現れているということを、改めて印象を強くするわけです。しばしばそういうことを経験するところから、精神分析は西洋人にはいい治療技法になり、精神分析理論は西洋で育った西洋文化を持つ人間の理解のためには大いに役に立つけれども、日本人あるいは東洋人は違うのだ、というような論理がでてくることとございまして。それに関連することとして我国での精神分析医が、我が国の患者さんを治療している、日本人の文化を考察する日本人の精神分析医として考察したものが、先ほどの甘え理論であるわけですが、実はその前に土居先生その他の私どもの先輩の精神分析医のうちの一人の先生にあたる古沢平作先生という方がいました。古沢先生が日本人の患者さんを治療していて、フロイトにその論文を提出した有名な概念がございまして。それは先程のエディプスコンプレックスに対比して阿闍世コンプレックスと言われる概念であります。阿闍世というのはもともとエディプスがギリシア神話からでてきたのと同様に阿闍世の物語は実はインドの仏教物語にあります物語の中から抽出されたと言うか整理された概念で

す。そういう意味では非常に東洋的、ひいては日本的な概念です。先程のエディプスコンプレックスが父母子の三者関係を中心とした概念であるのに対して、特に古沢先生が強調された阿闍世のコンプレックスは母子の二者関係を中心とする様々なコンプレックスに関する概念があります。これはちょうど甘えという土居先生概念がやはり基本的には子供の母親に対する甘えを基礎にして発展したものである。また古沢先生の阿闍世コンプレックスの理論もやはり子供の母親をめぐる葛藤、少し具体的に言いますと子供が母親を我物として子供か母親との一体感を楽しんでいる、そういう時期に父親の存在が関係してくるんですけど、自分以外のものに愛情を向けたり、関心を向けたりすることによって起こる異常な失望や怒り、それを巡る今度は母親に対する恨みやさらに罪悪感といったようなことを巡る葛藤の概念です。いずれにしても基本的に、阿闍世コンプレックスはエディプスコンプレックスに対比して、母子関係のレベルが強調されている。これが日本人の心性あるいは日本人の患者さんの奥深くに存在する無意識的概念であると述べています。こういうことから言いますと、非常に極論に至る場合には、エディプスコンプレックスを中心に発展した精神分析の概念が西洋人の理解や西洋人の患者さんの治療に役立つけれども、日本人に対しては阿闍世コンプレックスや甘え理論を中心とした母子関係的な治療理論や技法が必要であるし、精神病理の理解に対してもそういうものが必須だという非常に対極的な考え方が結びついてくる可能性があると思われまふ。しかしそこで私が臨床的に大事だと思ふことは、先程も少し申しましたようにあくまでそういう対比は事実であり、比較文化論としては尊重される価値の高いものであると思ふますが、臨床的にはよりそれらの背後にある人間としての普遍的な問題を見失うことのないようにする必要があるということです。実は先週の土日にかけて、日本精神分析学会が東京で開かれました。その前日の金曜日にアメリカの精神分析医をお招きして講演会がありました。その時のテーマが今述べました阿闍世コンプレックスを巡る問題で、たまたまその時にアメリカの精神分析医でおいでいただきましたのが最近までメンガーのトピカにいらした Dr. ラモン ガンザレンという精神分析医で、私がメンガーにおりました時に指導していただいた先生であるんですけど、その先生の阿闍世コンプレックスの論議の中に大まかに言いますと次のようなくだりがありますので、ご紹介させていただきます。「特有な日本的価値観あるいは日本に特有な文化的様式が事実ある。それは十分に考慮されなければならない。しかしそういう日

本に独特なユニークさというものは、一方から言えばまた相対的なものであつて日本人を治療するのに全く別の、西洋で育つた精神分析とは全く基本的に異なる探究方法が必要であるというものにならないのであつて、あくまでそういう文化の差異は相対的なものであるという認識を大事にする必要がある。」というお話をなさいましたが、私もそのお考えにまことに同感であります。逆に言えば日本人にも西洋人の先程私が紹介したほどに鮮明な形ででてくることは少ないけれども、日本人の患者さんを治療していればエディプスコンプレックスが問題になるし、特に病態のレベルによってヒステリーの患者さんの場合にはやはりエディプスコンプレックスが中心的な課題になるし、もちろん日本人の全体の中に病的であるか、健康であるかわかわらずエディプスコンプレックスは存在するし、それと同じ様に西洋人の患者さんの場合にも、ちょうど甘え理論や阿闍世コンプレックスによって解明されたような母子関係のレベルの問題が、厳然として西洋人の心性や患者さんの病理の中に見られるということでもあります。あと私に与えられました時間がもう5分程になったかと思ふますので、最後に治療的な治療者のもつ文化の問題についてふれてとりあえずの私のお話を留めさせて頂くことにします。今までの患者さんを巡る文化の問題にも少し話ができましたけれど、よく言われますように、日本人は日本の文化は全体に一体感であるとか、融合感であるといったものを強調する文化であるといわれるかと思ふます。それに対して西欧の文化は非常に主体性あるいは個性性を尊重して、自他の分離を非常に明確にする文化であるということが言われるかと思ふます。私は文化論についてあまり文獻的に詳しくありませんので、非常に体験的あるいは経験的に、そのように思ふます。そのことは私がアメリカに留学して3年間生活しておまして、アメリカの医師の患者さんに対する姿勢の中に何か、あれ、こんなに冷たい態度を取っていいのかなとか、非常にもつと優しくしてあげればいいのに、というような感情を持つことが特に最初のうち日本から行ってまもない頃にしばしば感じた印象でございます。患者さんに対する対応を見ておりますと非常によく言えば意図としては、患者さんの主体性を尊重し、独立を尊び、患者さんが依存しないで独立し、治療者から分離していくのを助ける態度であるということも言えまふけれども、日本では非常に患者さんと接する時に患者さんが求めてくる一体感に治療者としても応ずるような態度が比較的身についついてるもの、私にとりましては日本の精神科医の暖かさやアメリカの態度一種の冷たさを感じたわけでございます。そうは言ひまして

もこれがまた文化論の差異の強調の論議と同じように、あるレベルまではそういうことは今私が述べたようなことは、冷たい、暖かいということは言えるのかと思いますけれどもこれもあくまで相対的なことでありまして、基本的な問題であるとは言えないかと思います。最近の西欧の特に精神分析的領域において、治療者の持つべき態度として強調されておりますことに、1つはホールディングという言葉があります。ホールディングというのは hold, かかえるという患者さんをかかえる、あるいはもっと日本的な訳語としては、だっこするという訳語があてられておりますけど、そういう患者さんをかかえることの意味が西欧の治療者の中で、特に神経症水準よりも低い、いわゆる境界例であるとかあるいはスキゾイドパーソナリティの患者さんに対する治療者の望ましい治療態度として強調されつつあるように思います。それはまたマザリング、母親的な態度あるいは母親的な接し方という意味で、マザリングという言葉が holding と並行して西欧の中で強調されてきていることとも関係するかと思います。ある意味ではそういった holding やマザリング的な治療態度は日本の文化の中で育った治療者にとっては、比較的知らず身についていた、改めて概念化しなくても身についていた側面を、西欧の治療者たちが概念化することで、あるいはより理論化することで身につけようとしている。あるいはその意義を強調しようとしているところであろうかと思えます。そういいましても先程も再三繰り返しておりますような、あくまでそういった対比は可能ではありますが相対的なものであって、基本的には人間としての普遍性尊重を主張するのが私の立場でございます。私が以前翻訳いたしました本に、イギリスの精神分析の学派のメラニー クラインに発するクライン学派という学派がございますが、そのクライン学派の基本的なものを紹介した『メラニー クライン入門』という本がございます。その本の著者であるハンナシーガルという女性の精神分析家があります。その著者の日本語訳への序文としてくださった文章の中に次の様なくだりがございます。「現在にはもう世界に非常にビックリするほど様々な異なった文化や行動様式がある。家族構造の違いや宗教、社会的価値規範、力関係等々が、非常に違う。で個人はその文化の影響を受けて成長している。しかし一方でそういった非常に異なる考え方や文化や社会構造はすべて人間が発展させたものである。つまりそういった様々な文化というもの、ある意味で人間が持つ普遍的な問題の現れであって、その問題を解決する試みとして、文化が発展してきているのである。であるから私にとって心理学を学ぶということは

人間の精神の働きの中で何が普遍的なものであるかということについて学ぶことであって、各個人や各文化の様式が示すといろんな多様性の背後に、普遍的に存在するメカニズムを追求することが、私としての仕事であろうと思う」という意味のくだりがございます。これは実は医学的な背景から言いますと、心理あるいは文化をもう一つ、それからの基礎にある生物学的な存在としての人間という考え方に、そこでは非常に生物としての普遍性があるという考え方に結びつくことかと思えます。以上私は患者さんの西洋と日本の対比及び治療者の治療態度の対比を中心に述べさせていただきましたが時間を少し過ぎてしまいましたので、とりあえずここで留めさせていただいて他の先生方のお話を拝聴したいと思います。

大島：どうもありがとうございました。あの昔ですね、精神衛生研究所にレイノルズさんという人が、留学していたんですが、その方が最近森田療法の本を書いて翻訳がでておりますが、今岩崎先生のお話をうかがってますとやはり森田療法をアメリカ人向けに非常に改変して行なったら、治療効果があるかというやはりそれはちょっと疑問があるんじゃないかと思えます。文化摩擦ということ論じているんですが、どうも影響されている、というふうに考えます。日本人がかなり海外に出て、その日本人の心性にあちらの人も影響されているのではないかと考えられるんですね、先程の森田療法が外人によって紹介されていることもひとつその影響があるんじゃないかと、先程打合わせの時に星野先生とも話したんですがその最近のアメリカ人の若い人たちの中にははにかみとか、恥かしがり屋とかそういうものが増えていくということも聞いております。このようにお互いの影響し合いというのがあるのではないかなと、今お話をうかがっていて感じた次第です。では河野先生お願いします。

河野：私のテーマは自己主張の文化的比較ということなんですが、たぶんお2人の先生方が総論的なことをお話いただけると思いますので、私は非常に長い滞米生活の体験があるんですが、その中でどういうふう私個人として異文化に出会ってきたか、そういう出会いを通して私の職業的な成長と言いますか、職業人としてどういうふうそれが影響してきたかということをお話することによって一緒に考えていただけたらと思っています。一番最初に御紹介いただきましたように、私は精神病院に勤務しておりまして、1968年、渡米をいたしました。私の英語力というのはわずかでして、まあなんとか名前が言えたり、なんできたかと言え程度でした。英会話の教室に行ったんですがほとんど役に立たなくてと申し

ますのは出席しなかったことがあったりしたものですから、それでいきなりまいったところが非常にこれは日本に十分紹介されないまま消滅してしまったような施設で、そのことは残念だと思っているのですが、シナノンハウスといいまして麻薬、アルコール、それから精神病質人格のような人達が自分達で施設を作っていたんです。サンタモニカというところにあっただんですが、当時私が勤務しておりました病院の副院長先生が厚生省の麻薬審議官でいらっしゃって、彼が渡米してその施設をみてきたんですね。おもしろいことをやっているようだという形で、私どもがじゃ行って見てこいということを出していただいたんです。施設といいましてサンタモニカの海岸の瀟洒なホテルを買いきって非常に大きなコミュニティを作っておりまして、広い意味での人々の治療というものの枠を越えたひとつの社会感覚のような大きな試みを持っておりました。そこに私はいきなりはいたわけですが、当時はアメリカが公民権運動、黒人解放運動とかベトナム反戦それに私なんかに関わりを持ってます女性解放運動、つまりフェミニズムの問題なんかで大きく社会が変わりつつあるようなひとつの時期でした。特に非専門家主義というふうに言われましようか。専門家に対する非常に大きな不信というものが噴きだしていた時代でして、たくさんボランティアの人達が精神病院にはいり込んでおりましたし、特にシナノンハウスという所に集まっていた人達というのはたくさんのお金を払って分析を受けてるわけです。精神分析というのは高いのですが、いくら精神分析を受けても自分たちは治らないとか、各種の検査やテストをいくらやっても自分たちの役に立たないという強い不信感がありました。私のようなものが行っても、まああの専門家いわゆるかっこつけの専門家というふうな形でしか彼らはみなさないし、たくさん精神科医や社会学者がそのシナノンハウスにかかわっておりましたけど、誰一人専門家ではなくて単なる一人の居住者ということでした。私もそこによくわからないで行ったわけですけど、一つのプログラムにゲームというのがあって彼らはゲームとしか呼ばないんですけど、attack セラピーといっている人達もいます。少人数になって非常に攻撃されるんですけどたとえば日々の生活のちょっとしたことを言われたり、あるいは柵がありませんから逃げだそうとしているんじゃないかと、非常に心の奥深くある敵意だとか、否定的な感情、自分の自己評価の低さも含めてですが、そういったものが攻撃されるわけです。おおざっぱに言ってしまうとカタルシスと言いますが、そういう形で2時間ぐらいやり合うわけです。お互いにその場では何を

言ってもいいということです。私ももちろん参加するわけですが、ほとんど言葉が出てこない。出てこないことを私は英語がわからないとか、文化が違うからと言い逃れていたんです。そのときしょっちゅう私が問いかけられたのが“Who are you?”ということばです。あなたは誰なんだというわけです。これに答えようがないわけですね。「ソーシャルワーカーであるのはわかった、あなたが日本から来たのもわかった。何で来たのかもわかった」と「でもあなたのことがわからない」というわけですね。“Who are you?”ということ、とにかくゲームで言われるわけです。そうすると私はやっぱりニコニコして「まあ研究にきてる」と答えます。「じゃあシナノンは好きか」と言われると心の中では嫌いなんですけど嫌いというのは自分が専門家であると気負ってたわけではないけど、居場所が作りにくいという形で自分が非常に圧迫感を持っている。それを何とか見せまいとするわけですから、自分が必死に自分を支えているわけですね。そういうところで“Who are you?”と言われたり「シナノンは好きか」と言われたり「日本に帰りたいのか、もっとここにいたいのか」と言われるたびにニコニコと「好きだ」とか「もっと長くいたい」とそういうことを言ってきたんです。ある時女性ばかりのゲームがありまして、私も参加しましてその時私の一番仲のいい人が、仲がいいといいまして私には人を選ぶ力がありません。向こうが来てくれるのを待ってるだけですから、私の仲がいいというよりむしろ私に親切だったというだけなんですけど、その人が非常に私を攻撃しました。「あなたは日本に帰りたいんだろう」といいますので私が「帰りたくない、いや6ヶ月はいなくてはいけない」といいますと、そんなの「うそだ」という形で攻撃してくるわけです。「シナノンは好きか」「好きだ」「それも嘘だ。あなたはシナノンを嫌いなはずだ」、「なんでそんなことわかるのか」「いつもニコニコしている。ニコニコしているのは嫌いだから、その防衛だ」と追いつめられてゆくわけです。追いつめられていくというのは心理的な過程でいえば、脱がされていくという、自分がexposeされるといいますか、さらされていくということなんですけど、こういうさらされる方に非常に弱いわけです。こういう対立や緊張関係を私自身持ってきたことがないわけで、そういうふうにとさらされていく過程で私は泣きだしてしまい、「シナノンは大嫌い」だとか「もう日本に早く帰りたいんだ」と、自分をさらけだしてしまいました。そうするとみんながよってきて、私を攻撃した仲の良い人が、非常に暖かな声でかたりかけます。彼女はアルコール嗜癖で苦しんでいた人なんで

すが、アルコール嗜癖と同時に同性愛者でもありました。当時まだ同性愛というのはアメリカの精神医学会の1975年か4年かだと思いますが、同性愛は、性的偏倚、性倒錯からはずされておりますが、まだまあその概念の中に入ってたわけで、そういうことでシナノンに入ってきた人なんですけど、非常に暖かい声で「貴代美、あなたがよくわかった」と言います。私、貴代美というんですが、「あなたがよくわかった」と「あなたがいつもリサーチャーであるとか、ソーシャルワーカーであるとか何の誰べえである、という限りはあなたのことは何にもわからない」、「よく私たちはあなたのことがわかった」、「あなたには弱い心もあり、泣きたい気持ちもあり、日本に帰りたいという気持ちもあり、私達に対する悪意もあるんだということがよくわかった」というふうに言ってくれたんです。その時に“Who are you?”という言葉の意味がわかりました。私達は役割社会に生きております。何よりも役割が先行する、役割が即その人を使い表すかのような文化の中で生きているわけです。その傾向は最近ますます強くなっているんじゃないかという気がしますが、そういうところに安住しておりますと、やっぱりあなたは誰だと聞かれたら名前であり、年であり、渡米した目的が先に出てくるわけです。それがさきほどのような言語的暴力の下で、取払われてしまうと、私も非常に気が楽になりました。ここで何かを学んで私を送り出してくれた病院に返さなければならぬという変な気負いもなくなりました。当時の病院宛に英語で報告書を書かなければならなかったんですけど、西を向いても東を向いても英語でしか喋れないような所にいて、またわざわざ日本にいる日本人に英語で書かなきゃいけないなんてつまんなくなっちゃって、これもやめてしまいました。そういうふうなことで私が誰であるのかという疑問に直面したことがなかった。精神科というふうな所に勤めながら、私が誰であるのかっていうことが、よくわからないでいたわけです。このあとシナノンの人々が言ってくれましたし、「またシナノンへ帰ってこい」と私も帰っていくという約束をしたりしました。その後今度は東海岸に移りました。ボストンなんですけど、ボストンというのは精神医学のメッカです。先程の岩崎先生のおっしゃった土居先生のまだ甘えの構造にならない paper みたいなものをマサチューセッツ州の精神衛生センターという所があるんですが、そこで見せていただいたりしたことがあるんですが、そこへ移りまして大学院に行きケースワークの仕事に従事しました。ケースワークというのは個別処遇と申しますが、実際には心理療法とサイコセラピイの訓練なんですけど、それを2年

受けてきたわけです。シナノンで問われた“Who are you?”「あなたは誰なんだ」ということは、ずっとこの2年間も引き続いて残りました。サイコセラピイの仕事をしていても、この問題が頭を離れません。普通大学院のレベルはAかBしかないんですが、私はCという前代未聞の点数をもらう生徒でした。とにかく何がわからないかわからないという一年間を過ごしました。私のスーパーバイザーの方は非常に優秀な方で、私が何がわからないかわからないということを彼女が実に言い当ててくれました。それは人と関わるといことなんですね。この中にも臨床心理の方がたくさんいらっしゃると思いますが、少なくとも私が受けた4年間の大学の中では、たとえばケースワークという授業を学んできましたけれど、関わっていくということがどういうことであるかということ学んでこなかった。たとえば受け入れるということ学びますね、うんうんうんと聞いてくる。うんわかったと、でもねと言え、うんわかった、でもね、と言えこれはわかったことにはなっていないというわけです。頭では、「うんなるほど」と、ところが「うんわかった、なるほどなるほど」と言いつつ、「じゃあでもね」と言わないで受け入れていくとすると、もちろんこのでもね、というのはいないわけなんですけど、それがどういうことなのか、関わりにおける気持ちのやりとりというものがどういうものなのかがわからなかったんです。つまり病院の中でも私は役割としての私であった。役割としての私にすぎなかったんだろうと思うんです。そういうところでの何と申しますか専門性というのがどういう過程で熟してくるのか、それは単に学校を出たというようなあるいは教育を受けた。知識を得たという、そういう時間の中に属性として自動的についてくるものではないんじゃないかと思えます。私自身教育分析も受けました。御承知のようにアメリカのセラピストはソーシャルワーカーを問わず心理を問わず、精神科医を問わず、まず100%の人は自分達の教育分析を受けてきます。私も女性の精神科医の方に2年半にわたって教育分析、教育分析って言わなかった、自分の心理療法でいったって構わないんですけど、それを受けてきて、その中で私が何がわからなかったかということがよくわかってきました。それ以降非常に長い間、向こうで仕事をしてきたわけなんですけど、その中で自己主張という問題を考えるようになりました。自己主張というのは assertiveness とか assertive っていうふうに言いますが、動詞ですと assert と申しますね。主張するという言葉は少し assertiveness という英語に引き付けていえば、私達が考えている自己主張というのと違うんじゃない

いかと思います。さっき御紹介いただきましたように、私は *assertiveness* つまり自己主張の仕事にかかわっています。ただ私はこの言葉を自己表現と言い換えております。ただ自己表現とあまり言いますと話し方教室のような感じを受け取られるんですけど、そうじゃなくって自己主張というのは人と関わっていく関わりの形だと私はとらえております。よく日本人は自己主張しない、アメリカ人のかたは自己主張をよくするといういい方があります。その言い方は間違っていないと思います。ただ私達日本人も理論とか自分の考えみたいなものを述べていくということについて、学際的な訓練とか職業人としての場があれば、だんだん慣れていくし、話をしていけないなんていうことはないと思います。その意味では自分の考えていることを述べるということであれば、それはできるじゃないか、できるというよりも私達は普段やってると思います。おそらく外人、私が外人と申し上げた時にはどうしても私の体験から欧米人が主になってしまうんですが、あとアジアの方達の話はたぶん渡辺先生からしていただけると思って、私もうかがうのを楽しみにしているんですが、どうしても欧米人がモデルになってしまうんですけども、どうも私自身は若い小さい頃から自己主張型の人間のはずです。一般的に言えば私は活動的というふうによくも悪くも言われてきたタイプですし、生徒活動をやってきたり、人前で意見を言うことをそんなにちゅうちよしてこなかった。特に私は親達から女の子らしくという教育を受けなかったものですから、男の兄弟達と同じようにお前もやれというふうなことで育てられてきたものですから、良くも悪くも女らしい、行動のあり方や意識的なものから割と自由なつもりでいて育ってきたわけです。アメリカという異文化内の方に会うと、主張的であるということ、たとえば積極的であるということとは違ってくるなという感じが強くあるんですね。一つはそれは言葉を文化的なあるいは伝達の手段として、私達は言葉をあまり信じないんじゃないかなというところがあるんですね、言葉を信じないというのは、出した言葉が自分の気持ちと違うということが多いからです。さっきの土居健郎さんの例じゃないけれども、欲しいんだけど欲しくないというふうに言っているときっていうのは、欲しいっていう気持ちは言葉ではないわけですね。欲しい気持ちが伝わるのは気持ちとして伝わるか、わかってもらうというふうな、ある種の文化的な合意であって、実際言葉が伝えていくものっていうものの幅をすごくせばめてしまっているんじゃないかと思います。たとえばそれは理屈で「1+1が2」であるというような理屈ということにのみ限定していつて、

もう少し人とかかわっていく際の言葉のありようっていうふうなものを過少評価しているのかなというふうな気もするわけです。近年、メンガーの先生が日本によくいらっしゃると思います。つい最近もやっぱりメンガー・クリニックから精神科医とソーシャルワーカーの方がいらっしゃいまして、松沢病院のデイケアの人達と一緒に会がありました。パーシャルホスピタリゼーションっていいですか部分入院ですね、ナイトホスピタルとか、デイホスピタルという形で部分入院をしながら実社会で患者さんを社会復帰していくというセミナーといいますか、シンポジウムがありました。私はたまたま通訳としてそれにかかわただけで、非常に客観的な立場でセミナーを見てたんですけど、先生方が通訳の私を自由にしてくださらない。「いてくれ、いてくれ」というふうにおっしゃる。私はちょっと疲れたものですから、どうしても強引に昼休みに外に出ちゃったんですけど、でますと先生方は結構コミュニケーションしていらっしゃるわけですね。でどうも私達は以心伝心の文化に生きているというふうに、自分達そのものも思って、言葉がある種信じていない。じゃあ言葉がなければどうやってコミュニケーションするのかと言えば、手振り身振りでするのかと言えばそうでもない。言葉を信じていないんだけど、信じていないように見えつつも、コミュニケーションするっていう場合言葉に頼るっていう種の矛盾というかそんなことを感じたわけです。ですからそういう意味では自己主張というふうなものを同じレベルで日本人の自己主張は、あるいは欧米人の自己主張はというふうに論じても、少し次元が違うのかなというかんじを持っております。そういうことから考えれば非常に欧米的な自己主張というのは、たびたび先生方もふれていらっしゃいますけど、個がある *individual*, *individed* もうこれ以上分けられないという言葉からきておりますね。個というのは、そういう個というものの違いといいますか、とらえ方の違いというものを基礎にしないと考えにくいんじゃないかなと思っております。私は女性を対象にした自己表現のトレーニング、これはトレーニングで変えていこうと、学習なんだというふうには私は強く信じているんですが、その辺のことをもう少し後補足で説明させていただきたいなと思っているんですが、私の個人的な体験が随分時間をとってしまっただけで残念ですが、あと残された時間の中で少し補足していかれればうれしいと思います。どうもありがとうございました。

大島：どうもありがとうございました。私は臨床的な仕事をしていて感ずるんですが、精神分裂病の患者さん

でもそうですし、学校で教えている時もそうなんです、その時間が終る、規定の時間が終ると帰りしなに質問がでてくるというのが日本的な現象じゃないかなとつくづく感じているんですが、やはりアメリカで経験したことはもう自由に話の途中でも質問がでてくるというのが、向うの様式のように感じたんですが、このシンポジウムも、もし御質問があれば時間をできるだけ取りたいと思いますので、その節はよろしくお願ひします。先程お話にてたように、我々が今まで論じてきたのはどちらかと言えば欧米というようなものからみた摩擦というようなことですが、はたして東洋の諸国あるいはまた違った文化圏ではどんなふうにも摩擦が感じられるか、あるいは普遍的に摩擦というものを考えてみた時にどんなものがパターンとしてあるのかというようなことにもふれて渡辺先生に話をさせていただきたいと思ひます。お手元に資料がいつていると思ひますが、それを御覧になりながらお話をきいていただきたいと思ひます。

渡辺：渡辺でございます。一番最後ということで自分の番がくるまでいろいろ考えたり緊張がずっと続いておりますし、一番最後に話すのがいかに疲れるものかということを感じております。それと今先生方の話をうかがっておりますと非常に貴重なお話といひますか、私自身がさらにいろいろ自分の考えを述べさせていただきたくなるような非常に重要な問題がいつぱいはいつていたと思うんですが、先程大島先生がおっしゃられましたように、私の与えられたテーマは日本人とアジアの人達との間の文化摩擦の問題ということでござひますので、それに限ってとりあえずはお話させていただきたいと思ひます。お話をさせていただく前に私がどうしてアジアと日本の関係ということをは15年以上やっておりますかという、そのへんの理由をお話させていただきたいと思ひます。非常に個人的な事情もいろいろ絡まっておりますけど、まず最初に私が高校生の際は受験勉強をあまりやりませんで音楽ばかりやっております、自分は作曲家か指揮者になりたいという多少思い上った気持ちを持ってまして、ずっとその勉強してました。ぼく自身はフルートを吹きますが、バッハの無伴奏フルートソナタをいくら吹いても民謡調のバッハにしかならない、それから東京芸大の教授になられた先生に音楽理論を習っても、その先生から紹介される本、日本語に訳されたすべての音楽理論、音楽何々とありますが、ぼくはある時ふと気がついたんですが、中味は全部西洋音楽なんです。ですからある時ちょっと神経症的な行動でありましたけれど、本棚にあったその類いの本の表紙に全部西洋という題をわざと書いてみたんです。これは一つの実験

みたいな自分の認識を試すための実験でありましたけど、そういうことがござひまして私の中で西洋文明というのが、非常に取り組む課題であったわけなんです。それで日本にいながらにして西洋文明というものを自分なりに考える場所はどこかというふうには考えたんですが、一つ上智大学という西洋文明の一つの柱であるカトリシズムという大きな流れがござひますが、そこが経営している大学、そこに入学したわけなんです。そこでいろんな西洋人達あるいはアメリカの西洋ヨーロッパ系の人達との出会いがありまして、自分なりに先程先生方がおっしゃったようなアメリカでいろんなショックを受けられたのと同様なショックを山程、上智大学の中でいたしました。その中でだんだん自分自身を確かめるために、西洋文明だけを相手にしたのではどうも自分というものかももう少しわからないというところがござひまして、それでアジアとそれをまあ比較的自分が接しやすい場所をどこか捜したいという気持ちになりまして、フィリピンを選んだわけなんです。このフィリピンを選んだというのはまあ言葉の問題が一つござひまして、私は英語ぐらいしか外国語はあまりできませんでしたので、フィリピンでは英語が使われているらしいとわかったものですから、それでフィリピンという場所を選びまして、そこから留学に来てた人達に世話になって、日本に来てる文部省留學生の調査をしました。それがアジア Review 1976に載っておりますが、それが最初のアジアとのかかわりであったわけなんです。前置きはそれぐらいにして私の話を始めたいと思ひます。皆さんのお手元にござひます資料、いろいろごちゃごちゃと書いてござひますが、できるだけ手短にお話したいと思ひます。資料の中でへんな絵が書いてある方の資料をちょっと見ていただきたいんですが、そちらの左の上の方に私の話の内容が全部書いてござひます。いつぱい書いてござひますが、ポイントだけをお話したいと思ひます。まず第一に文化の違いと共通性についてのイメージということ、これは先生方のお話の中からも随分この問題がでてきましたね。普遍性および相違性というんでしょうか、その問題ですが、ここに私がちょっと一つの問題提起として出させていただいたのは、レヴィ＝ストロースはみなさん御存知の行動主義の人類学者なんです、彼の本の中に書いてある図ですね、これは私が今までいろんなところフィリピン、マレーシア、香港、アメリカ、シンガポールなどで調べました。その中でレヴィ＝ストロースの図が非常にすんなり受け入れられる。これは下の方にその図が書いてござひますが、左の方に人間の横顔いろんな形の顔がありますが、この違いは座標の、まあ上にも書いてありますが、座標軸のパ

ラメーターの違いなんです。要するに基本的には目があって鼻があって、あごがあって、頭があるとこれは変わらないんですが、この縦軸と横軸のパラメーターの違い、少しずつ変えていくといろんな形になる。これはデューラーという16世紀のドイツの画家、版画家がやったものをレヴィ＝ストロースがうまくまとめている。それから右の方にも同じ様な考えでトンプソンという人がだいぶ昔に書いた図ですが、左の方の魚はフグみたいですが、それをパラメーターを少し変えるだけでマンボウになる。基本的な魚としての構造はあんまり変わらないわけですね。ところが見た目にはマンボウとフグというのは全然違うように見えるわけですが、まあ私は文化の違いと共通性、あるいは人間の違い、男と女というのもせいぜいこんなもんなんだな、それが私に素直に入るイメージです。それでまずそれをお話してこれから私の主にフィリピンでのいろんな経験、あるいは今やっておりますアジア経済研究所でやっております技術移転の中の心理学的問題、これはフィリピンだけでなくインドネシア、タイ、マレーシア、インド、トルコ、エジプト、ケニア、ベネズエラ、そういう国々に日本から派遣された技術者の問題を深層面接調査から始めまして、数量的な分析もいたしまして、アジア経済研究所の一つのプロジェクトとしてやっておりますが、そのへんのお話をちょっとふれさせていただき、最後に星野先生も提起された問題ですが、文化摩擦を乗り越えるのはどうしたらいいかという問題、私の最終目的といいますか、実はこの問題が日本の中における教育の問題、私の課題としてそこに結びつけたいと思っております。それでまず最初に2番目のフィリピンでの事例に基づきまして、対人関係の見方のすれちがいということで、これは日本人がアジア的な主に農村部に向向って行った場合、どういうやりとり、先程河野先生からもやりとり、かかわりというお話、私もかかわり、ぼくの言葉で言えばやりとりという、これが非常に重要な問題だと思うんですが、そのへんのすれちがいの問題をお話したいと思います。お手元の資料の同じページの右の方に表がございます。ちょっとややこしい表でおわかりにくいかもしれませんが、これは以前日本心理学会で私が発表したものですが、そのフィリピンの農村地帯に行っております海外協力隊員および日本の企業から派遣された技術者の泊まり込み調査をいたしまして、その時に私は日本人の適応の問題というのはフィリピン人の側からもみてみないと、同時的に相互からみてみないとわからない問題がいっぱいあるんじゃないかと思ひまして、フィリピン大学のフィリピン人の同僚の先生にお願いしまして、ある2人の日本人の人、フィリ

ピンに住んでいる日本人のカウンターパートというか相手になっているフィリピン人に面接してもらった。私はその2人の日本人の面接をした。そして同じ質問を相互にしてみたわけです。対人関係上の特徴、共通点、障害がどういうものかと。そうしますとだいたいこういう結果が得られた。ここで全体的に大きな問題となるのは、2つほどありまして、一つは右の方がフィリピン人から日本人をみたらどうなるかということ、左の方は日本人からフィリピン人をみたらどうなるかということですが、ちょっとみていただくとわかるんですが、フィリピン人から日本人をみた場合に、たとえばこういう問題が起こるんです。英語でいうと *reciprocity* という言葉でまとめられるかもしれません。たとえばおごるということに関して、「招待されないことない」とか「おごられたくない」とか、が日本人の特徴であると言ってます例とか、私達が訪問するのをあまり好まないようだとか、それから共通点というところでも、贈物をする。日本人は贈物をする、挨拶をする。食事に誘う、タバコを勧める。こういうことは日本人もフィリピン人も同じだと考え、旅に出た時おみやげを買ってくるとか、アメリカ人と違って1度会ったら覚えていて挨拶をしてくれる。それから下の方に障害のところは手助けをしてもらうのが好きじゃないようだと、こういうふうにお互いの交流というんでしょうか、やりとりといひましようか、フィリピン人は関心がある。ところが日本人に少しは入っています。たとえば一緒に飲みに行くとか食べるといひがあります、それ以外の問題をいっぱいあげている。これが違うところ。それからもう一つはフィリピンの人にとっては対人関係の中でも関係の作り方、関わり方に非常に関心がある。日本人の場合は対人関係上の表現、自己表現、たとえば笑顔で接する、いい悪いを正面切って言わないとかそんなことが多いんですが、フィリピン人にはあまりそういうことが答えとしてなかったんですね。ゼロです。それよりも関係の作り方ということに非常に関心がある答が得られた。まあこういうことがあるのですから同じ場面であっても、そもそも関心の置きどころがちょっと違う、そこで擦れ違いが起こる場合が多いんじゃないかということがわかってきたわけです。それからもう一つはここでちょっと例に出てますが、おみやげの問題ですね。日本人は旅に出た時おみやげを買ってきてくれる。これは自分達と同じだといひふうに言っておりますが、これはもう少し聞きましたら実はこのことを答えてくれたフィリピン人はこういひふうに解釈したんですね。日本人が旅に出た時におみやげを買ってきてくれるといひのは、我々のフィリピン

人の風習をまねたと、学んだんだと思っていた。もう一人、相手の日本人に聞きましたら、そうじゃないんだ、自分がたまたま日本でやっているのと同じ事をやったんだとそういう答えが返ってきたんです。ですから行動の解釈の違いが、そこにあったんですね。こういうふうに見ますと我々の文化的な摩擦の問題を考える場合に、どうしても両サイドから同時に相互作用をとらえる必要があるんじゃないかと思いました。この事から考えまして、異文化間関係論という新たな領域をこれから進めていく必要があるんじゃないかということ、星野先生が中心となって編集されました。『異文化との出会い』川島書店から出ておりますその本の中で、異文化間関係論序というところで述べました。今の場合にはフィリピンでの事例ですが、もう少し広げてフィリピン以外の国で日本人はどういう経験をしているのかということ、ちょっとみたいんですが、これは先程申し上げましたアジア経済研究所でできております。技術移転の調査の中でその問題がちょっとでてきておりますので、みてみたいですが、同じページの右の方の下の方に資料の方というところ、これが今年の日本心理学会で発表した論文、訂正版、ちょっと計算しなおし、訂正したものです。因子分析をしまして、日本からいろいろな国に派遣された。アジア以外の国も入ってますが、技術者達がどういふ問題に直面したかということ、をまとめてみました。そうしますとだいたい4つの因子が出てきます。この中で私はここにも書きましたが、社会的な背景の違いからでてくる問題と、文化的な違いから出てくる問題を区別する必要があります。たとえば各国の主として日本人が相手にするのは技能者が多いわけですが、その人たちの職務遂行力の問題が最初にございます。意志が弱いとか、分析力、論理性が弱い、これはだいたい社会教育的問題が背景にあるわけですね。これを文化的な問題とは言えないと思う。それから一番下の職務認識の違い、第4因子ですね。これを私は文化的な問題もあるかもしれませんが、むしろ日本では想像、考えられないぐらいその西歐化、西歐的なマネジメントで向こうの企業では管理されている、あるいは大学でも教育されていることがございますので、そういう欧米的な職務認識、要するに課長と部下の権限が全然違う、はっきり区別されるそういう社会的教育的な背景が強いように私は思う。この4つの中で特に文化的問題になるとすれば2番目の因子ですね。自己尊重感の問題なんじゃないでしょうか。自己の問題です。たとえば人前で辱しめてはだめだとか、自分の方からおつつけたりやらせようとするのはだめだとか、派遣国の人はプライドが高い、多少やっぱり社会的な影響、

歴史的影響が入ってくるとと思いますが、これは文化の定義という問題にも関わりがある。文化の定義というのは非常に大きな問題でして、ここで論ずることはできませんが、そういうふうな因子分析の結果を解釈しますと、ここで一つスポットを当てた文化的な問題としては、自己尊重感ということがあります。その自己尊重感に関しては、フィリピンの農村部に行っている日本人の面接調査をしてまとめた中にもこの問題がでております。これはフィリピンでの例ですので必ずしも他の国に一般化できませんけど、一つの日本人のアジアでの文化摩擦の理解ということ、を助ける資料として皆様に御紹介したいのです。裏のもう一つの資料ですね。フィリピン人の国民性再考というこの中に日本人がフィリピンに行って感じた自己尊重感を巡るいろんな問題がまとめてございます。このなかで、中ほどに日本の文脈からみたフィリピン人像というのがございますが、この中に5つ程特徴がございます。これが日本人に深層面接をした時にでてきた問題をまとめたわけですね。要するに日本人がフィリピン人をどう見ているかということ。まず最初に外向的である。それから対人的、社会的関係において柔軟性がある。それから個人的文脈と社会的文脈との連続性が強い、それから4番目に対人的コミュニケーションにおいて、間接性、婉曲性を重んずるということ。それから最後に上下関係を重んずるということ。これは皆さんが意外に思われた部分かもしれません。たとえば最後の上下関係を重んずる点です。これは日本人の特徴ではなかったのかと思われるかと思いますが、フィリピンの人達は日本人からみるともっと上下関係を重んじているようにみえます。それから自己主張というところ、でございます。日本人は西洋の人と比べると婉曲性を重んじると言われてますし、我々自身も思っているんですが、そういう日本人がフィリピンに行きますと、フィリピンの人の方がもっと婉曲的であるということを経験するんですね。その次は、公私混同という問題です。これは日本によくみられるはずかしいことですが、西洋民主主義社会ではないですが、たとえば金丸さんなんですが今日の新聞に出ておりますが次期安倍政権、安倍さんを総裁にということがあげられましょう。そんなことは国民から見ると公私混同ではないかと言いたくなりますけど、そういう問題、公私混同ということが、割と日本人の中にはあると言われてますが、そういう日本人から見てもフィリピンの人にはもっと公私混同がいっぱいあるということ。3番目の問題は、個人的文脈と社会的文脈の連続性が強いということ。日本から行った人達は、職場での部下が家に手伝いに来たり、家族の事情

で仕事を休むのを見ると、公私混同だと考えます。よく見ますとそのフィリピンの人にとってはこうすることによって、自分が安定しているといいたいでしょうか、self identity を発揮していることになるのです。次は柔軟性の問題です。日本からフィリピンに行く人達がよく言うことですが、フィリピン人は約束時間を守らないと言います。この問題もこういうふうに解釈ができるわけです。たとえば今ここで楽しいお話をして、皆さん楽しい出会いがあったとします。しかし、次の仕事があって行かなければならない。だけど非常に話がおもしろい、なかなか歓喜を切ることができない。それで話を続けるために約束の時間が15分、20分過ぎてしまいます。けれども結局、次の約束の場所に行くことになります。そこへ行くと約束で待っている人は意外なほどにここにしている。なごやかです。こうした経験を積むと、日本から行った人はなんかいい加減なんじゃないかと思うわけです。ですけどだんだん慣れてきますと、この方が楽だという感じがでてくるわけです。それは自分自身がその時、その場を非常に大事に生きていてもそれが回りの人からある程度認められる、受け入れられる、お互いにそうしているというそういう関係ですね。ですからこれも自分を大切にするという、自己尊重でしょうか、そういうことの一つの現れなわけです。それから曲人性という問題も同じように思います。最後に目次のところで、個人と集団の問題がありますが、これはちょっと今まだ考察が不十分なんですけど、先程ちょっとお話がございましたが、個と全体の問題ですね、そのとらえ方がやっぱりいろんなところで、いろんな国の、いろんな文化の人では違うんじゃないかというふう思うわけです。自己尊重感という問題の基本には個の問題、それから全体の問題があります。もう時間がございませんが、次の4番目の点、第3文化を媒介とする対人関係の問題、これも日本人がアジア諸国、あるいはアフリカでも南米でもそうだと思いますけど、直面する一つ大きな問題ですね。これはどういうことかと言いますと、たとえば皆さんはフィリピン、香港、あるいはマレーシア、インドに行かれた場合におそらく現地の言葉ではなく、英語を使われる場合が多いですね。あるいは英語を使わなくても、現地の言葉あるいは日本語ですね、日本に留学して向こうに戻っている人達がいっぱいいらっしゃるから、そういう方と会った場合、自分と相手の人が出会った時にどういう行動基準をベースにして会ってる、コミュニケーションをしているか、という問題が非常に複雑になってくるわけですね。たとえば英語を使いますと、アメリカのあるいはイギリス的なコミュニケーションスタイルと行動基

準といいますか。それに従う。フィリピンこの人達もアメリカに留学している人達が多いですから、アメリカ的な行動基準でこちらにも答えてくる。このことは、フィリピンの人にとっても、日本人である自分にとっても母国語ではないわけです。ですからちよっと違う行動基準で行動を取っている。ですから2重の構造、ちよっと構造が複雑なんです。そういう問題がフィリピンだけでなく、いろんな国で起こる可能性がある。この問題も非常に大きな問題だと思うんです。もう時間がございませんので最後の一言だけ申します。星野先生ともお話ししたんですが、文化摩擦を超えるという問題を考えてと思います。星野先生も同じ超えるという字を使います。3つ程私は問題提起をさせていただきましたが、この文化摩擦を超えるためには、一つはやりとり重視の対応が重要だということ。やりとりというのは非常に極端なことを言いますと、こういうことになるんです。自分が仮に深いカルチャーショックに落ちいろうとも、相手が自分のために深いカルチャーショックに落ちいろうとも、やりとりをし続ける。やりとりというのは、たとえば話をしかけるとか、仕事は仕事としてきちっとやるとか、そうし続けることが重要であるのです。ですからお互いに自分と相手の間にどういう行き来があるのか、やりとりされているのか、関わりが今できているのかということに気持ちを向けた、対応の仕方ということを学ぶことが大切です。その下に幾つか例が書いてございますが、ソーシャルスキルトレーニングの問題があります。これは最近、心理学でも話題になっています。去年、ファーファムとボークという人が非常にいい本、『カルチャーショック』を出しました。これは非常にすぐれた本でして、この中の最後の方にソーシャルスキルトレーニングを異文化訓練に使うと効果的であるのではないかと論じています。それから最近はやりのシステム理論も、多少この考えに近いんじゃないか、家族療法とかそういうところでも使われてるんですが、そういうシステム理論的な考えを、この異文化の問題にも適用するとよいと思います。それから2番目には認識論の訓練、これは先程御紹介ございました星野先生が中心になって、編集されました川島書店から出ております。『異文化とのかかわり』という本がございまして。この中で私がちよっと述べた点なんですけど、自分と異質な世界、人に出会った場合の認識法ですね。これは心理学とか歴史学とか、歴史学では解釈学として最近問題になってます。これを普通の教育の場でもっともっと我々は訓練すべきではないか学校教育、企業、教育でも同じです。それから3番目、これは中曽根首相もこの間いってました。中曽根首相のブレインには

たいした人がいるんだなと思いましたが人類の一員としての認識をもっともっと深めるようなプログラムを我々は作らなければならないということです。これについて一つの例を申しあげたいんです。現在まだ筑波大学にいらっしゃるかどうかわかりませんが、筑波大学の客員教授としていらっしゃるフィリピン大学の政治学科のサニタ・ロマーナさんという教授、上智大学から始めて博士号をとった方です。日本人の国家意識という博士論文、その方とこの前話しておりましたら、彼の質問は優れた地域研究者というのはどういう人なんだろうかという話になったんです。私はそれはこういう人だろうと答えたわけですが「人類の一員を研究するという意識がある人は優れた研究者であると思う。」そうしましたところ彼の答えは、「そういう意識を持った日本人のフィリピン研究者はどのくらいいると思うか、いるのか」と、反論してきたわけで、かなり感情的になりました。というのはその背後には彼からみてあまりいないということなんです、これと同じ問題を実は私の友人で、フィリピン人なんですが、お父さんがスペイン大使で彼女自身もスペインで長い間居て、東京大学で勉強された。彼女にも同じ質問、こういう質問をしたんです。「フィリピン人をよく理解するのは誰なんだ。」とそうしたら彼女の答えは「日本人ではない」と、「アメリカ人とかヨーロッパの方が自分達をしっかりと理解してくれるように思う。」と、この問題です。こういう問題はいったい何なんだろうかということ。もしかすると我々日本人だけではないと思うんですが、人類の一員としてのフィリピン、たとえばフィリピン人、フィリピン社会を研究するという姿勢が、どれぐらいあるかということが、この問題に非常に影響しているんじゃないかと考えます。以上で私の話を終りたいと思います。

大島：どうもありがとうございました。非常に今までと違った角度から眺めていただいた議論だと思います。星野先生が用をひかえておりますので、もし皆様方の中で星野先生に御質問がある方がいらっしゃれば、先にお答えさせていただきます。このあとの質問の時もそうですが、学会会員の方は所属とお名前を言っていただき、一般の方はもしできればお名前を言っていただいて質問していただければありがたいと思います。特に星野先生は帰国子女の問題についてはいろいろ研究を重ねていらっしゃるので、もし一般の方でその辺の御質問をされる方がいたらどうぞ、あるいはシンポジストどうしの御質問でもかまいません。

某氏：3番目の自文化中心主義から4つ御指摘になりましたが、3番目の具体的な例を…

星野：個人内文化機構の問題ですか、これにつきましては小学館から出ております心理学講座の中で「文化と人間」という一冊がございますが、その中で学習院大学の田中靖政先生が詳しく取り上げております。元の考えは、ハリー・トリアンディスとおっしゃるイリノイ大学の先生で、先般この日本大学で日本心理学会がりましたときの特別講演者としてこられましたけれども、結局主体内文化といえますか、あるいは内面に取り入れられた、本来は外側にあるのですが、いわば認知的世界を個人が自分なりに取り入れた、そういう場合を指しているんですね。心理学の言葉で言うときよく認知地図(cognitive map)という言葉があります。それは現地そのものを表わしているものではなくて、現地をあくまで象徴して持ち運びやすいように持っている地図のようなもの、あるいはワーレスという人の言葉で言えば maze way と呼ばれておりますけれど、これは直訳すれば迷路のことなんです。いろいろ生活の中で問題に直面したり困ったときに、それを手掛かりにして1つ解釈したりあるいは解決の方法を考えるという、我々のもっている maze あるいは認知地図が非常に狭かったり単一である場合に、それと違う現地にいったときにはほとんど役に立たない事もあるし、それにしがみつくと非常に摩擦が大きくなるということがございます。簡単にいえば私達は先程言葉の問題もございましたけれど、言葉のやり取りの上で余り本音を言わないと、そして yes, no をはっきりさせない、ある程度ぼかして言っても分る人には分る、つまり相手の解釈なり理解を期待して甘えてつていうのか、そういうやり方でやっておりますけれども、これは外国へ出て私なんかもアメリカへ留学して一番直面したのが、例えば物を食べるにも自分が何を食べたいかということについて、yes か no か常にははっきりさせなければならない。卵を食べたいといえばそれは目玉で食べるのか、ゆで卵にするのか、さらにゆで卵なら何分ゆでるかということまでも、自分できっちりと決めた上で答えなければならないという、こういう心のセットというのは日本にいる間にはないですね。たいていお任せ式で朝飯一人前ということをやったものですから、一つ一つ味噌汁をいれるのか、まあ向こうには味噌汁はありませんが、コーヒーにするのか紅茶にするのか、砂糖は入れるのかクリームは入れるのか、絶えず自分が自分に問うてですね、その答えを用意しなければ向こうに対応できないという、そういう意味の自分の中のメカニズムがですね、非常に幅ひろくかつ強靱にできないとまづいということなんです。

大島：ちょっと司会者のほうからから質問ですが、渡

辺先生の場合も星野先生の場合も文化摩擦を超えるということをおっしゃたのですが、特に具体的なことで帰国子女の問題ですね、成人であれば、文化摩擦を超えるという意図的に、自発的にできる部分もあるけれど、まだ未成年の場合には超えさせるという作業が必要だと思いますが、その辺はどんなふうにお考えですか。

星野：そうですね。これは幾つかの事例について考えるとよろしいのですが、まあ普通幼稚園ぐらいで行った子供についてはあまり向こうへの適応を心配する必要はないと思います。また9歳前ならその事についてあまり心配する必要はないんですけど、ただ家庭の中で家族に問題があったり、母親との関係が悪い場合には、幼くても例えば6歳ぐらいの男の子がいろいろと不適応を起こす例があります。たとえばニューヨークの公的機関であるBOCSという教育機関ですが、公立校に入学した日本人の子供のいろいろ障害が出た子供を預かって心理検査などを行っているわけですけど、たとえば滞米6ヶ月の6歳の男の子は家では家族と日本語で話しをするのに、学校では一切話さない。教師や仲間が関わろうとすると机をがたがたさせたり、仲間を殴るといったacting outが見られる。どうしていいかわからない担任教師は、スクールサイコロジストから転校させたいということで心理検査の依頼を日本人の心理学者にしてきたんですが、知能には欠陥がないんです。検査の結果家族に問題があって、母親との親しい接触に乏しいこと、それと言葉の分らない不満とが暴力行為となって現れたと解釈したわけですけど、向こうの米国人の教師はこれに対してはなかなか対応ができないという状況があります。そして一般に日本人の子供は真面目で成績が良く指導しやすいのにこの子だけは違う。良い子は残ってくれていいが問題児は全日制の日本人学校に受け入れてほしいという、そういう注文まで付きまして、そしてそれからもう一つアメリカ人として面白いのは、物を言わないままに真面目に学習が成立し進展するとは信じられない、黙っていて事柄が分るといえるのは自分達には信じられない。だからおいといてもしょうがないという考えがでます。もっと活発に喋って会話が成立して、そしていろいろとそれこそ自己表現をやってくれるなら教育に値すると、こういう考え方が出てきますとそこに難しい問題になります。こういう子供達が向こうの教育状況に適応したとしても、帰ってきてからの問題があることは御承知のようです。いわゆる帰国子女の1割を超えずだと思いますけれど、現地校に適応した人が日本に帰ってきていろいろ問題が起きてしまう。それはその人の責任というよりは、日本側の受入体制の問題があって、これについては大沢

周子さんですか、文芸春秋から出ている『たったひとつの青い空—海外帰国子女は現代の棄て児か—』というかなり強烈な問題提起がございます。ここに出てくる3人の子供達、タツヤ、アキラ、麻衣子という子供達は母親の観察ですけれども、帰国してから編入された学校で身体症状が起こり、精神症状が起こり病名がつき、学習状況、成績、友人関係で、非常に心理的ストレスが高いと分かり、結局は教育上転校したり退学していくわけですけど、その間本人はどうにも変えようのない体の障害を取り上げられたり、靴を隠されたり、傘の先でつかれたり、鉛筆の削りかすを給食のシチューの上にふりかけられたり、死ねと書いた手紙をもらったり、あからさまに無視されたり、羽交じめされヘアースプレーを顔にかけられたり、下半身を剥き出しにして局部を傷付けられたり、ロッカーの鍵を壊され、中に入れておいた油絵がなくなって、ノートは写させんと取上げられたり、ごみ捨てをあなたの役目と決められ、ヘンジャバ、ヘンジャバとはやしたてられ、行った先の焼却炉の傍らの古材置場に、刃物で切り込まれた油絵がみつかったという子供達もいるわけです。ですから普通日本に起きているいじめが、こうした少しでも自分達と違うものに対して向けられるということからしますと、我々日本人がいわゆる支配的な標準から、規範からずれたもの、変わった者に対して自分達と同じ様に同調しなければいけない、同化しなければいけないという圧力を加え、そして異文化に対してそれを拒否しようとするときには、なかなかこうした文化摩擦の問題が海外では少なくなったとしても、国内で起きてしまうと、こういうことがあると思います。

大島：まだお聞きしたいことがあるんですけど、時間になりましたので、4:35まで休憩を取りまして、4:35からまた開会致します。

大島：だいたい時間が押せ押せになりましたけれども、先ず各シンポジストの先生方の補足、あるいはシンポジスト同士の質疑を、一人5分ずつというぐらいの時間の枠組みをとっていただきたいと思いますのでよろしく。先生方同士のご質問あるいは補足等岩崎先生のほうからいかがでしょうか。

岩崎：私は先程患者さんの文化および治療者の文化ということをお話ししましたが、そこでは普遍性ということをお話ししたわけですが、追加させていただくと、カルチャーショックを契機に精神障害を起した患者さんの例をお話ししたいと思います。日本人で外国に行き、外国にいる間に精神障害をきたして日本に帰ってくる。で日本で治療を受けるということはいまは経験する事実です。その場合患者さんの種類によって2つに分

けられます。パーソナリティのありかたと申しますか、日本に帰ってきてもう積極的な治療をしなくても、日本の文化に戻るといふことだけでよくなってしまふレベルの方があります。他方、帰国といふことだけでは回復できなくて、精神的な治療、特に精神療法や精神安定剤が必要なレベルの人がいます。カルチャーショックを契機に起こった精神障害の場合、そのいずれであるかといふことを見極めることが必要です。それからもう一つは先程の普遍性の問題につながることがございます。カルチャーショックを契機に精神的に具合が悪くなるといふことは、カルチャーショックを契機にはしておりますがもっと広くいふと、その本人を取り巻くいろいろな枠組み、心理的なオリエンテーションが関係していると考えられます。すなわち、必ずしも文化が異なる中に入らなくても、その本人を取り巻く心理的な枠組みや、オリエンテーションがはっきりしないような状況に入ると、精神障害になりやすいタイプの人がいます。そういう意味では精神分析的な立場から、心理的な structure が問題になります。ハルトマンは average expectable environment という概念を用いています。平均的なものを期待することができる環境という意味の言葉です。自分が身を置いている場所についての心理的オリエンテーション、あるいは予測度がどの程度あるかが問題になります。それが失われた場合、精神状態を維持できにくいパーソナリティ構造の在り方の人と、同じ場所におかれても、割合に安定した精神状態を維持できるパーソナリティ傾向の方があると思います。

大島：それでは河野先生

河野：私は女性を対象にどういふふうに自己主張をしていくか、関わりという形で問い掛けていき、問いをどう受け取っていくか、それをまたどう返していくかといふふうなグループ活動を通じ、自己表現のトレーニングをしています。特に女性の場合、フェミニズムあるいはフェミニストというのは、時々間違つて考えられております。女性に優しい男性のことを、フェミニストといふふうに考えるのが一般的ですけれども、言葉の正確な意味から言えば、フェミニズムあるいはフェミニストというのは男女同権主義といふことですか、いわゆるウーマンズリブの発想なわけですね。女性が一人の人間としてどういふふうに生きていくかといふような視点から、私はカウンセリングを考え、実践しております。女性の平均寿命は80歳を少し越えました。子供の数を1.7名としますと、妻であり母であるといふ従来の役割規定そのものが、心理的な充足を伴わなくなっています。昭和15年に女性の平均寿命は49.5歳でした。そのとき、末っ子はまだ小

学校の低学年だったわけですね。ですから自分の命が終るときにはまだ末っ子は学齢期にいたといふことで、多くの女性が社会的役割、妻であり母であるといふ役割そのものが、もう疑いもなく心理的充足をもたらして、その人の生活内容や人生を意味付けたわけですが、現実には物理的にはそういうふうなことはありません。ですからかつて女性が死んでいったときには、もうすっかり子供の手が離れてなおかつ30年といふふうな長い人生があるわけですね。これは男性にとつても同じことだと思ひます。人類が初めて経験している長く生きるという時間です。フロイトの言葉を使わせていただくと、エスから自我を経ないでいきなり超自我を身につけることと同じです。つまりそれは良妻賢母といふふうな、有るべき姿といふことになるわけですね。超自我がしんどくなつたらイドに戻つてしまふ。女子供と引つ括られる場合には自我の形成といふものがなくなります。その意味で私達は自立といふ言葉が単に経済的に自立するといふことだけでなく、自我の形成が培えないものだらうかと考えます。学習理論といふことですか、行動療法になると思ふんですけれども、自己主張的であるといふふうな行動様式、引込み思案でもなく攻撃的でもない、自分の言いたいことがいえるようにしたいと思ひます。そういうことをやってみると非常に女性が、こういうふうに言うところいふふうに思われるのではないかといふ形で、自分の感情を相手に投影している。相手というのは個である場合もあるし、自分を取り巻く世界でもあるわけですね。こういうふうにいふといへないのではないかといふふうな、そういうものを客観化していく、相対化していく力というのは、個のあり様と関係してくると思ひます。自分を対象化する、相対化するといふことを、私達はあまりやりませんけれども、それも文化の違いだと思ひます。そういうふうな形で自分の感じ方といふふうなものを、グループの中で客観化していく。その感じ方の正当性といふものやあるいは違い、主観の歪みみたいなものを修正しあつていくといふ形で、自分らしき私はこれを自分感覚と呼んでますが、アイデンティティを確立したいと思ひます。西洋的なアイデンティティといふより、もう少し関わりの中で自分を表現し相手も受け入れていけるような、そういう女性の自立といふのを考え、実際にやっております。

大島：有難うございました。では渡辺先生。

渡辺：私はフロアーにいらつしやる方とのやり取りをもうすこし大事にしたいと思ひますので、一分だけお話しします。河野先生のお話の中にありました、日本人の場合、言葉を信じないといふ問題を私の経験でいろいろ考

えてみました。言葉の持つ意味、機能というのは日本人と、フィリピン人、あるいはヨーロッパの人とは随分違うようだというふうを感じるわけです。その違いは先程私が紹介した、レヴィ=ストロースの図のような違いです。西洋人の場合、言葉と自分の体験とが非常に一致度が高いですけど、フィリピンの人はもっと言葉っていうものを楽しむ、人との間を楽しむっていいですか、そういう機能が強いみたいです。これに対し、日本人の場合はどちらかっていいますと、その中間でもあるようなないような感じです。ですから言葉自体の持つ機能は、やはり人々によって違うんじゃないかということをお頭に置いておく必要があると思います。

大島：どうも有難うございます。ここでシンポジスト同士のお話、あるいは補足というのは終わりましたので、フロアからの御質問があれば、所属、お名前、それと質問する先生をおっしゃっていただければ有難いです。

佐伯：慶応大学の佐伯です。ちょっと遅く伺ったので先生方全員のお話を聞いていないので、今日の日本人と文化摩擦という問題で、今考えておりますことが討論されたかどうか分からないんですが、何となく雰囲気的に伺ってますと、日本人であるがために、あるいは日本という文化の中に育っているために、文化摩擦が起こりやすいというふうな印象を持ったんですが、その様な点について渡辺先生どんなふうにお感じになっていらっしゃるか、あるいはそういう問題が全く今日討論されていないのであればそれはそれで構わないんですが。

渡辺：答えは現象的にはどんな人でも文化摩擦をいろんなところで経験しているんだと思います。ただ文化摩擦の慣れの程度といってしまうと、それへの対応の仕方というのは、日本人全体として見ますとまだまだ経験、歴史的な経験として、まだ慣れていないんじゃないかという気がします。ですから、教育というのが私の目標であるということはそういう意味も含まれているわけです。ですけど、今の日本人が良い悪いということではないわけですね。たまたまそういう流れにきていると、それをどうするかと、これはもう他の国とのやりとりのいろんな問題を分析する中で、現実的に考えていかなければならないというふうに思っています。世界中見渡せば、日本と同じような国が僕はあると思います。歴史的に他の国と余り交流がなかった国というのが。

大島：他にどなたか

丸山：日本大学文理学部心理学科1年丸山です。岩崎先生に質問します。先程これからは普遍的文化を支えていく普遍的なものを捜さなくてはとかおっしゃられまし

たね。そのことについてなんですけれども、精神分析理論のエディプスコンプレックスにしても、阿闍世コンプレックスにしても仮説ですよね。そしてこの仮説から神経症とかの治療をしてみると実際治ったという話が多いようで、この仮説は信頼がおけると本やなんかで読んできます。しかしこの仮説に基づいて普遍的なものを捜すとなると話は変わってくると思うんです。仮説に基づいて普遍的なものを捜して、果たしてこれが実証されていくかということになると神経症のようにはいかないと思います。それでこの普遍的なものを捜すに当たって科学的な精神分析理論に変わって他の方法論や立場が、もしあるようならお願いします。

岩崎：先ず第一に今の御質問の中で、たとえばエディプスコンプレックスとか阿闍世コンプレックスというのが、神経症とか精神障害者について普遍的なものであることは、臨床的にも確認されているけれども、それがもっと健康な人を含めた人間一般に普遍的なものである、ということは確認されていないという前提での御質問があったと思うんですけれど、そうですね。しかし精神分析的には患者さんを通して、そういう阿闍世コンプレックスとかエディプスコンプレックスというコンプレックスが、人間の心理一般に普遍的なものであるということ、臨床的に確認してきているという立場なわけです。ですからいまここで問題になってます阿闍世コンプレックスなりエディプスコンプレックスというのは、一つの仮説ではありますけれども、それが臨床を介してやはり人間の無意識的心理一般に普遍的に存在するものということが確認されてきているというのが精神分析の立場であるわけです。そういうことが一つとそれから精神分析以外にという点で何かあればという御質問については、私は精神医学者で特に精神分析を専門にしているものですので、他の領域のことについてあまりいろいろとお教えできるほどの知識はないわけですけども、他にもいろいろなアプローチというものが、普遍性を追究するに当たって可能なわけであると思います。私が知っていることで、今たとえば頭に浮かぶことから言いますと、そういう精神分析以外にもたとえば最近精神医学の領域では、精神生理学とかあるいは神経心理学とかいったような、特に生物としての biological な存在としての人間の精神機能の働きについてのアプローチというものがなされていると思います。それもやはり一つの精神分析以外のアプローチということになるかと思えますし、必ずしも医学領域に問題を限定しなくても、今日こちらに御出席の心理学者の領域でも、やはりそれぞれの専門が、人間心理一般的なものを追究しようとして、

それぞれのお立場をきつと持っているんだらうと、私は理解しているわけです。心理学の中にも、いろいろな立場があるんでしょうけれど、それは文化や個人の状況における個別的な問題について追究するも一つでありましょうけど、普遍的なメカニズムを追究するという意味では、心理学というより心理学の中にあるいろんな学派も、やはり普遍的なものを追究するものだらうと私は思っています。

大島：よろしいでしょうか。他に

恩田：私の意見を述べたいと思います。このシンポジウムは大きな問題を提起しておられたと思います。文化摩擦の問題は日本人だけではなく、特殊性と普遍性の問題をかかえていると思います。やはりここに問題になるのはですね、あらゆる面に通用する発達理論でも私は治癒、成長、創造という面から見て、その間に通ずる適応論というのを考えてみました。この文化摩擦というのはどういう意味があるかという、異文化との接触によるself identityの確立という、新しい自分を作り直すという問題があります。作り直す場合には自分を壊していく、いわゆるdissociation、それからもう一つはintegration、その過程が大きな問題になるんじゃないか。異文化にぶつかる場合には、今日、明日には結局このままではなくて、自分をぶっこわさざるをえない。そこに一つの危険性がありますね。ある場合には不安というかそういう面もあるし、それからそれを克服すればいわゆる、成長とか創造ということとなるわけです。そういう面でいえば異文化の接触、それから葛藤があり、そこに不安の状態が生じ、それが安定化するところに新しい創造活動が生じてくる。まあそういう問題が一つあるような気がする。そういう点で私は治癒の理論と創造論の間には、重要なつながりがあると思いました。それからもう一つ、この創造論には星野さんがいなくなっちゃったんですが、いわゆる異文化の接触ということによって、すなわち異文化の結合によって新しい創造が、新しい文化が生まれるわけですが、場合によってはただ結び付けるだけじゃなくて、自分を壊して新しく解体して作り直していくところがあるんです。人格と環境との、あるいは文化といってもいいんですが、その関係で自分をこわしていくそういうような面で新しく自分を作り直して行く。例えば不安を述べる場合には好奇心がある。すなわち新しい文化に接することが面白くてしょうがないんです。異文化に接すると不安というマイナスの面が見られるのに、一方では異文化に接触して非常に好奇心を持ち、積極的に発見とか創造をしていく。そのような大変大きな

問題があると思います。それからあと渡辺先生のこの図ですね。これはあるかたは創造論の面から取り上げたんですね。フグとマンボウは、いわゆるパターンが一つなんです。類比(analogical)に等しいのです。但し条件が違うわけですね。ですから原理が等しい場合、条件が違うとすでにあるものが新しいものに転換する。だからこれを原理的に同じものとする、いわゆる同定とか等価変換という言い方をします。同定するけれども条件が違うわけですね。ですから我々日本人と中国人とかアメリカ人とか、みんな結局人間として同じだといっけども、文化、社会や歴史などの条件が違うわけです。そこの処で苦慮するのです。ですから普遍性と特殊性の両面を見ないといけません。両面をつないで初めて生き生きとした具象性が出てくるわけです。だから違う違うと言っても間違いで、また同じだと言っても間違いです。両面をとらえなくては、そういう問題があるので、我々がこういう文化の接触の問題を取り上げるときに、日本人というものが、いわゆる世界的な地球人としてとらえられる面と、それから他の民族と違う面との両面、共通する面と違う面が出てくるので、そういうことをとらえるにはこの図は面白いと思います。

大島：有難うございました。まだいろんな問題がありますし、私自身も質問したいポイントもあるんですけど、ちょうど時間となってしまいました。今の恩田先生のお話が、最終的にまとめのようなお話になりまして、非常に有難く思っています。文化摩擦について私共一つのテーマを出したんですが、問題が明白になった部分もございすけれども、それぞれにまた広がった疑問というのも持たせられたような気もいたします。それぞれ御専門の立場の方が多いと思いますので、またこれを機会にそれを広げていただいて、再び議論する折を持たれれば有難いと思います。大変今日は気温も下がっておりまして、雨が降った中、遠いところ参加していただいて有難うございました。シンポジストの各先生方有難うございます。以上をもって終了いたしたいと思います。

村井：講師の先生方、御来場の皆様方有難うございました。今日の内容につきましては、応用心理学会の機関誌、「応用心理学研究」に載せる予定でおります。ただし年1回の雑誌ですので来年になりますけれども、会員の方は当然配布されますけれども、それ以外の方で御希望の方がいらっしゃいましたら、学会事務局の方までお申し込みいただければ、おおけできます。今日は雨の中有難うございました。これで終わりたいと思います。